

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：14701

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24653229

研究課題名(和文) 今、新たな教養像の構築に向けて、教育哲学の果たすべき役割とは？

研究課題名(英文) Toward the reconstruction of liberal arts education, what kind of role should the philosophy of education play now?

研究代表者

天野 雅郎 (AMANO, Masao)

和歌山大学・「教養の森」センター・教授

研究者番号：80151124

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：21世紀は、大学の激動の時代である。この研究は、そのような大学の激動の時代において、大学の再生の可能性を教養教育の視点から考察したものである。そのために、この研究では日本の近代の教養教育が、これまで辿って来た歴史を振り返り、それをヨーロッパの教養教育の理念と比較しながら、その影響関係や齟齬について吟味し、さらに加えて、21世紀の新しい教養教育の可能性について、理論と実践の双方向から、教育哲学による提言を行なったものである。

研究成果の概要(英文)：The 21st century is the time of turbulence of the university. This study, in the times of turbulence of such a university, considered one possibility of the reproduction of university from a viewpoint of liberal arts education. Therefore we looked back on the history that the liberal arts education of modern times in Japan followed until now and compared the idea of liberal arts education of Europe with Japan and investigated the relations of influence and disagreement. In addition, we thought about the possibility of a new liberal arts education in the 21st century and proposed it from both sides of theory and practice by the philosophy of education.

研究分野：哲学

キーワード：教養教育 教育哲学

1. 研究開始当初の背景

大学教育の危機（クライシス）が叫ばれ始めて、久しいが、この数年来、そのような危機は教養教育の復興と、結び付けて語られるようになってきている。その背景には、いわゆる国際化（internationalization）を遂げた世界と、それを通り越し、さらにグローバル化（globalization）を遂げた世界の中で、そのような世界を生きる人間相互の、意思疎通（コミュニケーション）の要として、教養が再認識をされ、再評価をされてきた経緯が伏在している。また、それと同時に現在の、はなはだ細分化をし、先鋭化をし、要するに専門化（specialization）を遂げた学問への不安と、その知識や技能が現実には及ばず弊害から、人間の倫理や責任を問う声が教養を問う声と重なり合い、大学教育における教養教育の復興と、その具体的な方策が求められているのが、昨今の状況である。

2. 研究の目的

大学（universitas university）の誕生以来、ヨーロッパにおいては一千年紀（ミレニアム）の長きに亘って、日本においても19世紀の後半以降、百数十年に及んで、大学教育の二つの支柱と目されてきたのは、教養教育と専門教育であり、この二つの支柱の、どちらか一方を欠いていたり、蔑ろにしていたりする所には、これまで歴史上、大学教育の名に値する教育が、成り立った例（ためし）はない。この研究では、そのような大学教育の両輪である、教養教育と専門教育の歴史を振り返り、その現状を問い、あるべき姿を見つめ、そこに将来の、新しい時代に相応しい、新たな教養像を構築すること、そして、そのために本来の、哲学（philosophy = 愛知）の機能である「悦ばしき知」を、広く、深く大学教育の場に持ち込むこと、それが目的である。

3. 研究の方法

平成17年度（2005年度）以降、現在に至るまで、ちょうど十年に亘って存続してきた、和歌山大学教育学部の「文化研究」(cultural studies) プログラムが、この研究の母胎である。すなわち、この間、このプログラムを中心になって運営し、授業計画から学生指導に至るまで、すべての作業を共同で分担してきた四人の教員の、理論面と実践面とを兼ね備えた、活動報告として本研究は位置づけられる。したがって、この研究では理論的に、私たちの国の教養像の変遷を、近代以降の日本において辿り直し、それを世界の教養史の一環として位置づけながら、これからの時代と社会を生きる、21世紀の大学生に相応しい教養とは、どのような教養であるのか、それを具体的に、実践的な授業計画や学生指導を通じて模索するのが、この研究の方法である。

4. 研究成果

(1) 平成24年度（2012年度）

この年度は、私たちの国の教養像の成立と、その解体の過程について、整理をした。この点については、すでに優れた先行研究（竹内洋、筒井清忠、荻部直、等々）があるが、そこには少なくとも、哲学面や文学面からの考察が上乘せされる必要がある。とりわけ、ここでは夏目漱石門下の考察が中心となった。また、そこには『構想力の論理』という形で、当時としては斬新な、画期的な想像力論に着手しながら、未完のままに手放さざるをえなかった、三木清の功績等も改めて、振り返る必要があった。すなわち、私たちの前に「教養」という語が姿を現し、それが英語の culture やドイツ語の Bildung の翻訳語として登場し、やがて「文化」と並んで一世を風靡するに至った大正時代の状況すら、それほど私たちは明瞭に、その実情を把握しているわけではなく、いわんや、当時の「教養主義」の背後にあって、それを支えていた、当時の

ヨーロッパの哲学や文学の動向については、むしろ私たちが現在、再検討しなければならない課題であろう。

なお、本研究の開始時と相前後して、和歌山大学では「教養教育改革」が始まり、この研究組織も学部内の、課程やプログラムの枠を超えるものとなった。子細に言えば、研究代表者は和歌山大学の教養教育担当の副学長となり、新設のセンター（「教養の森」）の長を兼務することになったし、研究分担者の一人は教育学部長を引き受けるに至った。要するに、このようにして現在、和歌山大学では大学全体を挙げ、教養教育刷新の取り組みが行われており、この研究組織は結果的に、その中心的で主導的な役割を果たすに至っている。したがって、本研究が当初の目的として掲げた、教育と研究の双方向からの教養像の構築は、少なくとも教育面においては、予想以上の成果を挙げていることになる。実際、和歌山大学では他大学に類を見ない、全学部・全学年の学生を対象にした、四年一貫の教養教育のゼミナールも始まっているし、さらに「21世紀」問題群や「わかやま」学という名で呼ばれる、独自の教養教育科目も開設されるに至っている。

（2）平成 25 年度（2013 年度）

この年度は、主としてヨーロッパの教養像と、その思想的背景について、理論的な考察を加えたが、この点に関しても、すでに優れた先行研究（阿部謹也、樺山紘一、村上陽一郎、等々）を挙げることができる。ただし、その多くはヨーロッパの中世の教養像を前提にした、いわゆる「自由学芸」の理念を掲げており、そこから 21 世紀に相応しい、新たな教養像を導き出すことが叶うのか、どうかは定かではない。本研究では、代表者も分担者も、これまで全員が、そのような教養像の歴史の変遷と、その思想的背景について、主と

して哲学と文学の側から、考察を加えてきており、とりわけ近代以降の、解釈学や文学理論を通じて、あるいは「生の哲学」を通じて、ヨーロッパ近代における教養像の成立と、その崩壊の過程に関心を持ち、研究を続けてきた。その成果は、特に 19 世紀から 20 世紀に掛けての、例えばデイルタイの哲学やカフカの文学の、いわゆる講壇哲学や教養小説の解体の経緯と重ね合わせる形で、やがて公表される予定である。

ちなみに、この年度も研究代表者と研究分担者の職務が多忙を極め、それぞれの任（副学長・学部長）に忙殺されることになった。それに加えて、この数年来の文部科学省による「大学改革」の動きと、各学部の「ミッション再定義」に応じて、この研究の母胎（「文化研究」プログラム）も数年後には、廃止が決定される事態にまで至ってしまっている。その結果、本研究は学部単位の研究から、大学全体の研究へと、その領域を移行せざるをえないことになったし、その対象も広く、全学部・全学年の学生へと拡張せざるをえないことになった。幸い、次第に本研究の取り組みは、他大学やマスコミを通じて評価をされるに至っており、この年度には滋賀大学と福島大学から講演依頼があり、さらに『毎日新聞』と『読売新聞』と『朝日新聞』の、各新聞社からも取材を受けることになった。いずれも地方国立大学の、特徴的な「教養教育改革」の取り組みとして、和歌山大学の企てが注目され、評価されるに至った結果であろう、と自負している。

（3）平成 26 年度（2014 年度）

この年度は、基本的に報告書の作成が主要な課題であった。が、その作成に際しては、教員の側の報告と学生の側の報告とを、うまく一つに纏め上げるような工夫を凝らし、独自のスタイルを作り上げたい、と願っていた。

なぜなら、このプログラム（「文化研究」）では学生の入学時から卒業時まで、複数の教員が一貫した、共同指導体制を採っており、それは従来、大学教育の陥りがちであった閉鎖的なシステムを打破し、打開するために、新たに試みられている企てであり、具体的には学生の入学時から卒業時まで、このプログラムでは一貫して、総合的な講義と演習という形で、常に複数の教員が顔を揃え、教員と学生とが、そして同時に教員と教員とが、学生と学生とが、お互いに豊かな交響を奏する仕組みを取り入れているからである。本研究では、そのような仕組みの中で行われてきた授業科目についても、それぞれの内容や方法の検証を行ない、それぞれの授業科目の配置や相互関係について、全体的な反省を加えることが課題であった。

結果、このような計画の通りに、この年度は報告書の作成と、その公刊が中心の作業になった。この報告書は、以下の研究成果に列記されている、研究代表者と研究分担者の各論文に加えて、この事業期間中に研究代表者を取り組んできた、和歌山大学の教養教育スペシャルサイト（「教養の森」）に連載中のエッセイ（「教養」の来た道）の一部を参考資料として添付し、これに過去八年間（平成 20 年度～平成 26 年度）の卒業論文題目一覧を加える形で、年度内の公刊に漕ぎ着けることが叶った。報告書に収められた論文は、本研究の役割分担を踏まえ、これに實際上、この事業期間中に開講した、担当授業科目の成果を上乗せにして、研究分担者が各自の立場から執筆をしたものに、研究代表者が全体の総括を図ったものであり、ほぼ予定通りの、計画通りの仕上がりになっている。が、これに加えて、本来であれば本研究の、もう一つの柱であったに違いない、学生の側の取り組みの成果が報告書の中に、うまく盛り込みえなかった憾みが残った。

5. 主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 12 件)

天野雅郎、教養の森、インゴルシュタットの森、和歌山大学「教養の森」センター年報、査読無、第 1 巻、2015、17 - 24

天野雅郎、園芸家の十年、研究報告（DOCENDO DISCIMUS）査読無、第 1 巻、2015、7 - 15

永井邦彦、大学教育における映像文化論の展開、研究報告（DOCENDO DISCIMUS）査読無、第 1 巻、2015、16 - 29

佐藤和正、近代文学研究と「教養主義」の衰退、研究報告（DOCENDO DISCIMUS）査読無、第 1 巻、2015、30 - 35

小関彩子、良識を涵養する知性と知性を超えるもの、研究報告（DOCENDO DISCIMUS）査読無、第 1 巻、2015、36 - 46

天野雅郎、「三木清」の伝え方、研究報告（DOCENDO DISCIMUS）査読無、第 1 巻、2015、49 - 74

天野雅郎、コラム《教養教育改革》、和歌山大学教育学部紀要（人文科学）査読無、第 64 集、2014、121 - 140

永井邦彦、鬼神ヲ哭シムルモノアリ、点描 欧米の文学（大阪教育図書）査読無、第 1 巻、2013、31 - 73

永井邦彦、クリント・イーストウッドの『硫黄島からの手紙』、和歌山大学教育学部紀要（人文科学）査読無、第 63 集、2013、215 - 224

天野雅郎、教養論ノート、和歌山大学教育学部紀要（人文科学）査読無、第 63 集、2013、236 - 256

天野雅郎、教養の哲学、和歌山大学教育学部紀要（人文科学）査読無、第 62 集、2012、55 - 74

佐藤和正、ポストモダンにおける物語の読者像、和歌山大学教育学部紀要（人文科学）

〔学会発表〕(計 4 件)

小関彩子、ベルクソンとデュルケムにおける言語の社会性と個人性、第 36 回ベルクソン哲学研究会、2015、龍谷大学

Ayako OZEKI, Sociality and Individuality of Language in Durkheim and Bergson, XVIII ISA World Congress of Sociology, Sociological Analysis of Language, 2014, Yokohama (パシフィコ横浜)

天野雅郎、「教養の森」の、志(こころざし)や如何に? 福島大学大学改革セミナー(招待講演)2014、福島大学

天野雅郎、和歌山大学「教養の森」センターの取り組みについて、滋賀大学教育改革フォーラム(招待講演)2013、滋賀大学

〔その他〕

教養の森(和歌山大学 HP)

<http://www.wakayama-u.ac.jp/kyoyonomori>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

天野 雅郎 (AMANO, Masao)

和歌山大学・「教養の森」センター・教授

研究者番号: 8 0 1 5 1 1 2 4

(2) 研究分担者

小関 彩子 (OZEKI, Ayako)

和歌山大学・教育学部・准教授

研究者番号: 1 0 3 7 9 6 0 4

佐藤 和正 (SATOU, Kazumasa)

和歌山大学・教育学部・教授

研究者番号: 2 0 1 6 2 4 1 4

永井 邦彦 (NAGAI, Kunihiro)

和歌山大学・教育学部・教授

研究者番号: 5 0 1 4 4 6 3 9